

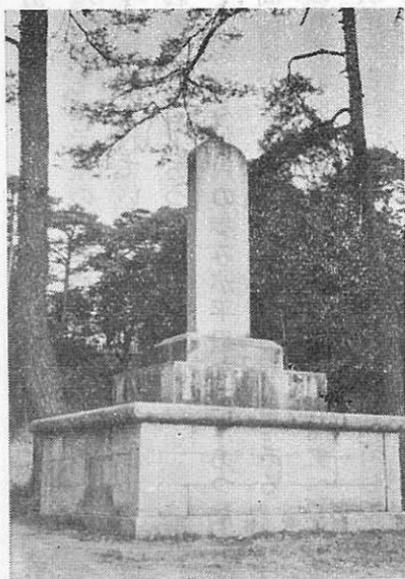
四、毛筆をめぐる生活

(一) 熊野筆の由来と毛筆功勞者

全国の生産額の九割を数える熊野筆は、まさに毛筆業界の偉觀といわなくてはならない。「姉も妹も筆造る」熊野はまことに筆の都にふさわしい町であり、副業を含めて全戸数の約八割は毛筆業に従事している。そして他町村から新しく来る人もきまつて筆作りを習い始める。

毛筆の原料の主なもの

は毛と竹であるが、そのどちらも熊野町にはない。また四面は山であり、一步熊野町から外に出ようとすれば直に四軒に近い峠道がわれわれを待ち受けている。こうした町に毛筆業が発達したのである。そして隣接町村にはその面影さ



熊野毛筆元祖頌徳之碑

鉢山神社境内にあり筆の都熊野のシンボルで、祖先の偉業が現在の熊野町にさながら生かされていることを知る。

えも見ることができない。それならば、なぜ原料もない山間僻地に特殊産業である毛筆が造り始められたのであろうか。われわれはこゝに地理的条件を克服して

偉業を成し遂げてきた祖先の労苦を思いやるのである。げに沙漠の中にも文化の花は開くのであり、地理的条件は人間生活に決定的なものではないことを示している。

芸藩通誌の熊野村の項に「居民農余行賈の者あり」とあるが、恵まれない農民の喘ぎは当時も現代と異なるものではなく、当然副業にその活路を求めなくてはならない。それが出稼ぎである。農閑期を利用し、または自家労働力に余裕のある農家の子弟達は、大和の国吉野地方に行つて、高野山等の登山者の強力や紀州熊

野川の木材運搬、木挽等の稼業に出かけた。そして帰途奈良地方に産する筆墨を仕入れ、諸国に行商するの
が例であつた。こゝに毛筆と熊野町の結びつきが見られるのである。

かゝる基盤の上に、たまたま弘化三年（一八四六）の頃当地の住人井上治平（井上弥助）は十八才にして
広島の新屋町に在住していた藩主浅野家の御用筆司吉田清蔵について製筆の法を習得し、帰村の後村民にこ
れを伝えた。また同じ頃当地の人音丸常太（音丸常太郎）は摂津の国有馬より同じく製筆法を習得帰郷し、
その技術を村民に伝えたのである。これが今までわれわれが考えてきた熊野筆の元祖である（註1）

熊野を訪れる人は榊山神社境内の毛筆元祖の碑に二人の先覚に思いを馳せるであろう。また場所をかえて
同じように毛筆元祖の碑（註2）が建てられているのに気づいて、思わず目を見はる人があるかも知れない。
碑文に見える佐々木為次は隠れた先覚者であつた。

しかし、こうした先覚者やそれを巡る村人の歩みが平坦な道であつたとは考えられない。（註3）それは製
造技術の問題と販路の問題が同時におこいかぶさっているからである。ひらたく言えば、でき上つた製品は
売られなくてはならない。この方面の努力も毛筆に携わる人々のすべてが経験したところであるが、中でも
嘉永以後、才兵衛（孫井田正次郎）らは行商に努力し、販路を開拓してきた（註4）また明治の初期から中
期にかけて片川仁一郎も製作技術の改良と販売に尽くしてきた（註5）

初期の生産状況（註6）

年	本数	代価	職工
嘉永年間	千本	三十円	十名
明治元年	十五万本	一万二千元	八十名
十六年	百四十万本	二万一千元	一

毛筆業はこうにして発展してきたわけであるが、その将来
を約束されたのは明治五年の学制発布である。事実維新前の毛筆
業は熊野筆の基礎ではあつてもその実績は表に示すように高いも
のではなかつた。

くだつて明治十年、東京で開催された内国勸業博覧会には西尾
平助が自作の毛筆を出品し（註7）入賞している。こうしたことは

熊野筆発展の為の一つの契機になつたに違いない。同じく四十四年四月には東京に於ける日本文具教育博覧
会に毛筆を出品し好評を博している。（註8）

また毛筆業の発展の為に大切な要素である書道教育の充実は、初期の毛筆業に大きな影響を持つていた。
こうした立場から本町の書道教育に尽力してきた弘化以後の隼田静流（註9）や明治中期まで活躍し七十五才
で亡くなつた梶山直人（註10）らにも一応の注意が向けられなくてはならない。

明治三十三年小学校令改正、義務教育は四ヶ年となつたが、この頃から日本の教育は、制度、施設の整備
等著しく向上し、就学状況も目に見えてよくなつた（註11）これに伴つて、毛筆の需要も急激に増加し、本
町の毛筆業も年々隆盛の域をたどつたのである。この頃、東京、大阪、京都、奈良等の製筆工業地は諸種の
新興工業の発達に反して、大規模な発展を見ることができなかつた。それには種々の原因もあるが、この
山間僻地の本町の人々が、毛筆に精魂を傾けて、その隆昌を招いたことが圧迫になつたことも一つ数えられ
るだろう。

しかし、この中にも悩みはあつた。それは前に述べた優良品の生産の問題（註5）である。熊野筆の量産
は年を追うて増加してきたが、品質向上の念願は如何なる業種でも永久に止まるものではなく、独り毛筆業
が例外たることはできない。こうした努力を払つた人々は数多くあるであろうが、文献に残されたものでは
前記片川仁一郎もその一人であるし、安芸郡新民会長からその功績を認められて表彰された七筆会（註12）

もそうであり、そして大正三年頃設立せられた毛筆奨励会（会長伊藤明三外四十四名）や工親会（会長横山
万次部外六十名）も同じ目的をもつた実践団体であつた。このような動きは従来の毛筆業がやゝもすれば個
人的、散漫的であつたことに対する反省であり、集団の効果とその必要を人々が汲みとつたからに外ならな
い。それは郷土産業としての自覚であり、近代化されなくてはならない毛筆工業自身の必然の要請であつた
こうして設立されたのが熊野商工会（大正十五年）であり、熊野毛筆業は町を単位として一つの近代的自覚

を持つたのである。

この熊野商工会が熊野筆の発展に貢献したことは、熊野に生れた人は誰もが認めるところであり、昭和以後の熊野筆の歴史は、実はこの商工会の歴史に外ならないのである。ただこゝで附言しておきたいことは、昭和十年熊野筆振興の実践機関として熊野商業組合が誕生し、これが現在の毛筆事業協同組合に接続しているという事実である。商工会とこの毛筆組合が表裏一体となり熊野町の、そして熊野筆の発展に不断的努力を重ねているのである。

商工会や毛筆組合の歴史については次に述べるが、その間の事情で特筆すべきことは、熊野筆の地位が単なるメーカーとしての地位にとどまらず、仕入、販売に於て自主的行動をとるようになったこと

一、戦中戦後を通じて立場は違うが、困難な中に熊野筆が文化の向上に大きな役割を持つことを身を以て体験したこと

一、特に昭和二十二年度の学制改革に伴う小学校に於ける毛筆習字の廃止は、毛筆業の将来が新時代に即していかにあるべきかを深刻に考えさせ、日本独自の文化建設の為、熊野筆は積極的に参加すべきであるという信念に達したこと

等である。細部の事情については後に述べるとおりでである。

熊野筆は以上のように毛筆元祖と言われる特定の人によつて始められ発展してきたと考えるが、実はそれにとりまく熊野の人々の蔭の努力があり、熊野筆の由来は熊野町民の歴史を語るものであることを忘れてはならない。たゞし、われわれは毛筆元祖といふ、功労者と称せられる人々に、感謝こそしても決してわれわれの地歩にひき下げようとはしていない。謙虚な気持は持つていふつもりである。

註1 熊野毛筆元祖頌徳之碑文(昭和二十二年八月之吉)

安芸郡風教誌(大正四年発行)

実業功労者

乙丸常太郎

井上彌助

本郡熊野村に於ける製筆事業は隣村矢野村に於ける製鬚事業と相俟つて、実に本郡及本県下に於ける資源の權威たらざんばあらず。蓋し之が起源は、今を去る五十六七年前の事に属す。而して今其の元祖を尋ぬるに、乙丸常太郎、井上彌助の兩氏に原くものゝ如し。

抑創業の当初は、按未だ熟せず勢亦振はざりしに、鋭意技を磨き、熱誠業を励み、人を導き世を警め、孜々として成功を期す。苦辛察するに余あるものありて存す。

既にして明治十年、初めて内国博覧会を開催せらるゝや、此の地西尾平なるもの、自製の毛筆を出品し、正に入賞者の一員に列せらる。

乃ち大に勢を得、爾來莠奮砥礪、業大に振ふ。勢既に此の如し。乃ち今は其の製造戸數八百余、従業者一千五百余人。一ヶ年の産額約二百余万対、価格約三十万円を上下せりと云ふ。兩氏の余沢亦威なるかな。

書きしるす 筆のいのちも つきぬとも つきぬは君が いさを なりけり

誰か又兩氏を徳とせざるものぞ

註2 昭和六年一月建立、毛筆の祖佐々木為次先生碑(城之堀区)

佐々木為次先生ハ文政五年九月四日屋号城之堀事佐々木家ニ生ル天保五年十三才有馬ニ行キ毛筆製造之技ヲ習得同九年十七才ニシテ本村ニ帰郷而シテ村民ニ此ノ技ヲ教ヘ拯メ一生ヲ終ル時明治十七年一月行年六十三才

註3 大正六年八月十五日発行広島朝日新聞

本紙に掲載された熊野筆の起源及沿革によると、天保年間に天涯無宿の一介人が本村を訪れて毛筆製造を始め、数年後村人はこれを習つてきたが、十数名は摂津の国府馬に赴き、技術を習得して帰り、製造販売に従事したと思いに任せなかつたとある。たゞし具体的事実については、詳細なる検討の域には達していない。(文章は少しく誇張的である。)

註4 同前、才兵衛は安政三年死、また同紙には天保九年、広島藩士野崎左衛門は彼の創業を援助したとあるが、今は考えない。当時の販路は隣国や四国、九州であつた。

註5 明治四十二年建立の碑(呉地区)

片川仁一郎君ノ製筆ニ一心ヲ盡クサレシ功労多大ナルモノアリトシ有志者相謀リ君ガ功績ヲ石ニ刻シ後世ニ伝ヘ以テ同業者奨励トナサント欲シ文ヲ予ニ囑ス予君ヲ知レリ且君ガ功績尤モ我が県下ニ見ルベキモノアリ故ニ辞スルコト能ハズ其梗概ヲ述ベントス

父兼助君ハ明治初年ヨリ製筆販売ノ業ニ従ヒ各地方ニ奔走シ需要ノ如何ヲ実檢シ十一年某日鹿兒島市ニ開店セリ兼助君五男一女ヲ有ス君ハ長男ナリ次ニ彌一兼松明三盛夫一家和親眷ノ如クニシテ皆業ニ従フ熊野村ノ製筆ニ於ケルハ只數ノ大ナルヲ以テ世ニ知ラレ其ノ優等品ニ至リテハ素ヨリ得意トスル所ニアラス特ニ優品ヲ製出スルコトアルモ熊野ノ名ニ因リテ輕視セラルル憾ナキ能ハス君之ヲ憫嘆シ自ら東ニ奔西ニ走視察ヲ遂ゲ製作上大ニ改良進歩ヲ期シ且下部下ヲ督勵シ銳意事ニ當リ其ノ成績顯著ナルモノアリ今ヤ出所ヲ問ハス至ル所歡迎セラル此翁達ヲ見シモノ即チ君ガ多年苦心ノ賜ト言ハザルヲ得ズ鹿兒島ニアリテハ彌一君其ノ他ノ令弟協力シテ兼助君ヲ助ケ其ノ勉強ト篤實トハ日ニ月ニ繁榮ノ基トナリ本県下ハ勿論九州各方面ニ信用ヲ得名声ヲ博セリ蓋シ亦君ガ功勞与テ力アリト言ベシ有志家君ガ功德ニ感じ此ノ美

挙ニ出タルモ豈ニ偶然ナランヤ 鹿兒島 小松文雄撰

註6 嘉永年間と明治元年のものは大正六年八月十五日発行の広島朝日新聞所載、明治十六年の表は安芸郡下戸長連名の県令千田貞曉宛の建白書（佐々木高博氏藏）の附表による、出所が異なる為兩者を同列に見ることはできないが、発展の過程はうかゞえるであらう。

註7 佐々木亮氏記録の内国勸業博覧会出品目録（広島県第三大区）

同時に熊野村からは鉾石（吉田幸三郎）雲母箔（佐々木 亮）を出品

註8 獅山神社奉納掲額、問屋組合、二六人

註9 靜流華田翁之碑（吳地八幡神社境内）

翁広島県安芸郡熊野村人父道壽長於筆札教子弟有年通称源兵衛翁名道恒通称松右衛門從父受書法業大進年十六歲已代父教子弟更師旧藩士書家小野某所謂御門流者尤發揮其蘊奧名震遠通称妙手翁教而不倦從弘化甲辰至明治癸酉三十六年如一日熊野村及近村入門者百數十人矣配結城氏前没男五人女二人後更娶三宅氏翁温而雅善容人人皆敬愛之吉凶盛衰未曾不請翁蓋其德自有高於人者不独書法也茲門人相議欲建碑以報恩來請余碑銘余不散辭作之銘曰

筆札妙手資性篤行 其德馨香人皆愛敬

旧広島藩儒 山田養吉撰

註10 明治四十年十月建立、梶山先生之碑（獅山神社境内）

先生諱直人姓梶山彌伊勢守家世為熊野村獅山八幡宮社司資性率直而奉神最虔恰好学善書殊巧草書流高雅頗有趣致遠近之子女就受教者常滿門教授親切未曾見倦色明治廿二年十一月廿七日病歿享年七十有五有三男二女長男正美嗣蓋在明治維新前小学校之制未行之時而使闔村之農賈能書尺牘錄簿冊日用無憾則實先生之賜也今茲門人相謀各自捐資建碑於獅山勤其事蹟之一端以伝不朽亦報本之微意也

從五位 黒川 續撰 西尾 平書

なお、この碑に刻んである門人は熊野村七十二人、本庄村五人、

註11 広島県教育八十年誌、全国の就学歩合は、明治十一年四一%、明治二十七年六一・七%、明治三十六年九三・二三%

註12 安芸郡風教誌の表彰文

安芸郡熊野村 七 筆 会

夙に志を村民和徳ノ開発、地方風儀ノ改善ニ注キ、図書縦覧所ヲ設ケ、新聞紙雜誌等ヲ備ヘテ村民ニ閱覽セシメ、或ハ時ニ講師ヲ聘シテ講演会ヲ開キ、又意ヲ産業ノ発達ニ留メテ製筆事業ノ改良ニ貢献スル等、善行頗ル嘉スベシ。依テ本会々則第六条ニ依リ、茲ニ之ヲ表彰シ金壹封ヲ贈与ス

明治四十五年三月三十日

広島県安芸郡新民会長 從六位勲五等 古田 頼 巳

なお七筆会のメンバーは、尺田徳太郎、和田虎吉、神鳥林右衛門、工田旧七、城本稔一、藤田德行、藤林房吉の七人。